

ペルー国立リハビリテーションセンターにおけるこれまでの活動成果

松田史代¹⁾

要旨

2015年・2016年と独立行政法人国際協力機構 JICA 短期ボランティア事業「ペルー障がい者スポーツ支援派遣事業」において、ペルー共和国の首都リマにある日ペルー友好・国立障害者リハビリテーションセンター(INR)で障がい者スポーツ普及支援活動を行う機会を得た。この事業は、2014年より3年間を通して理学療法士・作業療法士の専門職スタッフ通算6名および理学療法学専攻の学部学生(2~4年生)通算23名の参加により支援事業が行なわれた。昨年度の活動をもって長期ボランティアスタッフの不在等の理由により、事業の在り方の見直しを行うこととなった。今後の活動の在り方等について調査を行うため、2017年8月26日~9月11日までの17日間自費渡航し、INRでの障がい者スポーツの現状や、INRスタッフとのミーティング、ペルー JICA 事務所スタッフと今後の展望等について話し合いを行ったので若干の考察を加えここに報告する。

キーワード：障がい者スポーツ，リハビリテーション，理学療法，国際交流，国際協力

I：これまでの活動経緯

日本の政府開発援助 (Official Development Assistance : ODA) を一元的に行う実施機関である独立行政法人国際協力機構 (Japan International Cooperation Agency : JICA) の開発途上国への国際協力を行う事業のひとつに青年海外協力隊・シニア海外ボランティアがあり、その中でも活動期間が異なる短期ボランティア派遣事業と長期ボランティア派遣事業がある。

原則的に、短期ボランティア派遣事業は、長期ボランティア派遣事業との連携が必須であり、長期ボランティア派遣事業での活動サポートを行うことが多い。

「ペルー障がい者スポーツ支援派遣事業」においても、2012年度より理学療法士の長期シニアボランティアの派遣が行われており、先代のシニアボランティアが障がい者スポーツを広く受け入れるために、ペルーでの障がい者スポーツ指導員講習会の企画を行った。この障がい者スポーツ指導員講習会開催にあたり、日本側からの人的支援で2014年に第1次短期ボランティア (理学療法士2

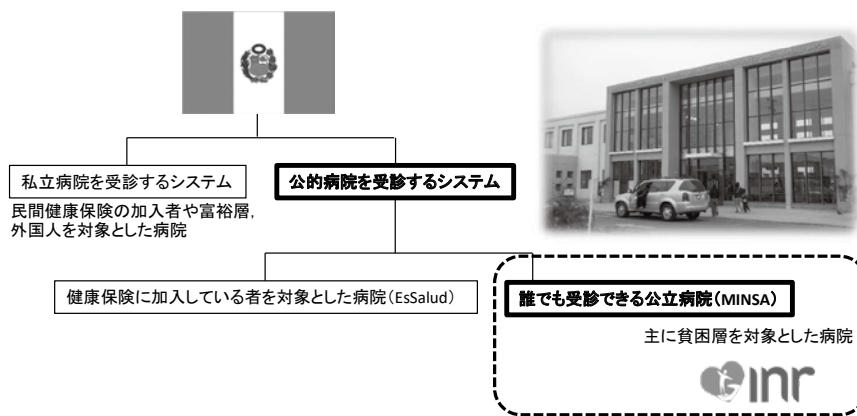
名、学生8名) が派遣され^{1,2)}、2015年に第2次短期ボランティア (理学療法士2名、学生8名)³⁾、2016年に第3次短期ボランティア (理学療法士1名、作業療法士1名、学生7名) 派遣⁴⁾となった。

その間、初代長期シニアボランティアの任期が2014年度末で終了し、2015年は日本側の長期ボランティアのメディカルスタッフ不在の中、渉外促進を担当していたシニアボランティアの方が日本側とペルー側の調整を行っていただき、活動することが出来た。2016年は理学療法士有資格者の二代目の長期シニアボランティアが活動中であり、その中で短期ボランティアを受け入れていただいた。しかし、二代目の長期シニアボランティアが家庭の事情により任期短縮で帰国し、2017年以降の短期ボランティア派遣事業の受け入れ態勢が作れない状況となった。

II：カウンターパートナー機関

ペルー共和国首都リマにある日ペルー友好・国立障害

¹⁾ 鹿児島大学医学部保健学科臨床理学療法学講座
連絡先：松田史代
〒890-8544 鹿児島市桜ヶ丘8-35-1
TEL/FAX: 099-275-6801
Email: fumiyo@health.nop.kagoshima-u.ac.jp



国の予算より運営されているが財源確保が難しく、経営はとても厳しい

図1 ペルーの医療システムと INR の外観

ペルーの医療保険制度は、日本の皆保険制度と異なり、民間の健康保険制度の加入の種類や、属している社会制度により、受診できる医療機関・医療サービスが異なる。

者リハビリテーションセンター (Institute Nacional Rehabilitacion : INR) は、2009年より日本の無償資金協力により建設計画がはじまり、2012年にリマ市のチョリヨス区に移転・新築されたペルー国内初のリハビリテーション専門病院である。

日本の無償資金協力により建築された医療棟 (外来診察室や運動療法室、義肢装具製作所、画像診断解析室等)、入院棟 (脊髄損傷の患者のみ)、食堂があり、ペルー政府側の資金により現段階でも建築中である研究棟や講堂等がある。

ペルーの医療制度の中で、INR は保健省が管轄する公的病院を受診するシステムの中でも主に貧困層を対象とした病院である。そのため、患者は貧困層が多く、通院や医療・福祉サービスを受けるにあたり、さまざまな課題も多いのが現状である (図1)。

Ⅲ：第1次短期ボランティア派遣事業 (2014年)^{1,2)}

2014年8月18日 (月)～9月11日 (木) の日程でペルー共和国首都リマにある日ペルー友好・国立障害者リハビリテーションセンター (INR)、Federico Villarreal 大学、ペルー JICA 事務所、ペルー日本大使館、ペルー移住資料館を訪問した。

派遣メンバーは、理学療法士有資格者枠で、2名 (国際医療福祉大学大川キャンパス理学療法学専攻内教員2名)、障害児・者支援枠で鹿児島大学医学部保健学科理学療法学専攻3年生2名、国際医療福祉大学大川キャンパス理学療法学専攻4年生3名、3年生3名の計8名で構成された。

活動内容としては、初代長期シニアボランティアの配属部門である「脳損傷部門」を対象に、「ボッチャ」・「グ

ランドゴルフ」・「フライングディスク」・「風船バレー」・「卓球バレー」の計5種目の導入を行った。

Ⅳ：第2次短期ボランティア派遣事業 (2015年)³⁾

2015年8月17日 (月)～9月11日 (金) の日程でペルー共和国首都リマにある日ペルー友好・国立障害者リハビリテーションセンター (INR)、Federico Villarreal 大学、ペルー国立競技場、ペルー JICA 事務所、ペルー日本大使館、ペルー移住資料館を訪問した。

派遣メンバーは、理学療法士有資格者枠で、2名 (鹿児島大学医学部保健学科理学療法学内教員1名、東京都の臨床勤務の理学療法士1名)、障害児・者支援枠で鹿児島大学医学部保健学科理学療法学専攻3年生4名、2年生1名、国際医療福祉大学大川キャンパス理学療法学専攻4年生2名、3年生1名の計8名で構成された。

活動内容としては、対象部門を「脊髄損傷部門」・「切断部門」・「発達障害部門」・「知的学習障害部門」の4部門へ拡大し、それぞれに「車椅子バスケットボール」・「アンプティサッカー」・「車椅子卓球」・「レクリエーションスポーツ」・「ポートボール」・「(大) 縄跳び」の計6種目を導入した (図2)。

Ⅴ：第3次短期ボランティア派遣事業 (2016年)⁴⁾

2016年8月16日 (火)～9月16日 (金) の日程でペルー共和国首都リマにある日ペルー友好・国立障害者リハビリテーションセンター (INR)、Federico Villarreal 大学、ペルー JICA 事務所、を訪問した。2015年度は、障がい者スポーツ指導員養成講習会をペルー国立競技場で行ったが、今年は INR の中庭に屋根付きのピロティ、講習



図2 第2次短期ボランティア派遣事業（2015年）の活動風景

「脊髄損傷部門」・「切断部門」・「発達障害部門」・「知的学習障害部門」の4部門に対して、「車椅子バスケットボール」・「アンブティサッカー」・「車椅子卓球」・「レクリエーションスポーツ」・「ポートボール」・「(大)縄跳び」の計6種目の伝達講習会をINRスタッフとともに、実際の患者さんに参加してもらい実施した。



図3 第3次短期ボランティア派遣事業（2016年）の活動風景

「脳損傷部門」・「脊髄損傷部門」・「切断部門」・「発達障害部門」・「知的学習障害部門」の5部門に対して、「ボッチャ」・「車椅子バスケットボール」・「(車椅子)卓球」・「シッティングバレー」・「ポートボール」の日々の障がい者スポーツ集団リハビリテーションの時間の練習時間に参加し、競技についてのアドバイスや講習会のワークショップを実施した。

会等開催できる講堂が完成したため、INR内で実施した。

派遣メンバーは、理学療法士有資格者枠で1名（鹿児島大学医学部保健学科理学療法学内教員）、障害児・者支援枠で鹿児島大学医学部保健学科理学療法学専攻3年生2名、2年生1名、国際医療福祉大学大川キャンパス理学療法学専攻4年生1名、3年生3名、スペイン語圏長期ボランティア経験者の作業療法士（今回有資格者枠は理学療法士枠のみであったため障害児・者支援員枠での参加になった）1名の計9名で構成された。

活動内容としては、これまで2年間携わった「脳損傷部門」・「脊髄損傷部門」・「切断部門」・「発達障害部門」・「知的学習障害部門」の5部門すべてを対象とし、各競技内容は、活動中の長期シニアボランティアが事前にINR内のスポーツ委員会で意見を聞き、パラリンピック競技

を見据えた国際大会のある競技「ボッチャ」「車椅子バスケットボール」「(車椅子)卓球」「シッティングバレー」に決まった。

「ボッチャ」は小児発達部門と脳損傷部門、「車椅子バスケットボール」は脊髄損傷部門、「(車椅子)卓球」と「シッティングバレー」は切断部門になり、知的学習障害部門からはパラリンピック競技ではないが、日々の「ポートボール」「集団活動練習」にも協力を仰がれ、活動することとなった。

また、INR内のスポーツ委員会より国際パラリンピック委員会による「パラリンピック障害区分」についても知識を得たいとの要望があり、障害区分についての説明会も実施した（図3）。



図4 世界脊髄損傷の日で INR 内でのイベント風景

INR 内に通院中・入院中の脊髄損傷の患者さんたちによる、車椅子を操作してのバレーの伝統ダンス披露や、車椅子操作技術の披露会、車椅子バスケットボールの試合等が行われた。合言葉は、「Si Podemos!」（出来る！）の通り、日頃の練習の成果を発表する良い機会になった。

VI：調査目的

以上の3年間の活動を踏まえ、これまで伝達講習会を行った計12種目（ボッチャ・グランドゴルフ・フライングディスク・風船バレー・卓球バレー・車椅子バスケットボール・アンプティサッカー・車椅子卓球・レクリエーションスポーツ・ポートボール・(大)縄跳び・シッティングバレー）がどのように INR の各部門で定着しているか、また、どのように患者さんへ導入されているか、現状を確認するとともに、上記の障がい者スポーツを集団リハビリテーションの一環として行っているスタッフと現時点での課題や今後の展望についてミーティングを行うこととした。

また、INR 内の現状と今後の INR との国際協力の在り方について、JICA ペルー事務所と話し合いの場も設けることとした。

VII：調査日程

2017年8月26日（土）～9月11日（月）の日程で渡秘した。当初、これまで短期ボランティア派遣事業で関わってきたペルー障がい者スポーツ指導員講習会が、9月6日～7日に開催される予定であり、翌8日にスポーツイベントが開催予定であったため、渡秘の日程を合わせた。しかし、夏季初旬に INR 内で労働組合のストライキ騒動があり、日程が9月末へ変更となった。しかし、事前の INR 内スポーツ委員会での実行委員会の打ち合わせ会議は出席することができ、講習会の運営等についてどのような意図を持ち、構成されるのか把握することが出来た。

また、9月5日（火）は世界脊髄損傷の日で、脊髄損

傷部門主催のイベントが INR 内であり、参加することが出来た（図4）。

VIII：INR 内での障がい者スポーツの活動状況

INR には、集団リハビリテーションの一環として障がい者スポーツを取り入れている「知的学習障害部門」・「脊髄損傷部門」・「切断・姿勢異常障害部門」・「発達障害部門」・「中枢神経障害部門」がある。それ以外にも、「学習障害（高次脳機能障害）部門」・「言語障害（失語症難聴嚥下障害）部門」・「疼痛・運動器障害部門」がある。

初代の理学療法士シニアボランティアの配属部門が「脳損傷部門」であり、第1次短期ボランティア派遣事業でも脳損傷部門を中心に集団リハビリテーションの一環としての障がい者スポーツの導入を行ったため、他の部門と比較し、障がい者スポーツの種類や備品等に関しても一番充実している。とくに、脳損傷部門は独立した運動療法室を持しており、環境面が整っていることも他部門と比較し、大きな差である。その他の部門は、中央の運動療法室や中庭を時間制交代で利用しており、集団リハビリテーションを行える時間や環境が限られているのが現状である。

今回の訪問時には、「知的学習障害部門」はおもに「ポートボール」を中心とした集団リハビリテーションを行っており、走る・ボールを投げる・ボールを受け止める・ボールをパスする・ボールをシュートする等の基本動作の練習や、これらの動作を複合的に組み合わせた練習を個々の患者さんの理解度別実施していた。基本的には、理学療法士1名に対し、参加する患者さんは5



図5 INRの運動療法室と集団リハビリテーションの風景

INR内には時間制で各部門が利用できる運動療法室と中庭があり、ここで主に集団リハビリテーション（障がい者スポーツ）を行っている。その他、脳損傷部門と発達障害部門は独自の運動療法室がある。基本的に備品の管理は部門毎に行っており、部門間を超えての備品の貸し借り等はない。

～15名ほどであり、理解度の良い患者さんが理解度の低い患者さんに指導する等患者さん間での関係構築も意識して行っていた。

「脊髄損傷部門」は、「車椅子バスケットボール」に熱心に取り組んでいた。昨年の活動でJICAの物資支援により競技用車椅子を10台寄贈してもらい、練習環境が整った点も大きい。しかし、コンタクトスポーツである車椅子バスケットボールをリハビリテーションの一環として行うための担当医師からの処方許可が得られにくい状況や、比較的体力のある男性に偏っている等の問題も今回見受けられた。担当している理学療法士が熱心に指導しており、リマ市内の車椅子バスケットボールチームを紹介し、退院後も継続してプレイできるように環境整備にも意識を持って取り組んでいた。これらの退院後のフォローアップには、二代目の理学療法士シニアボランティアが外部団体の開拓・関係性構築を活動中に行っており、その成果が結びついてきているように感じた。

「切断・姿勢異常障害部門」は、昨年「シッティングバレー」の要望があり、今年も継続してシッティングバレーを集団リハビリテーションの一環として行っていた。しかし、集団リハビリテーションに参加する切断者の大多数は、糖尿病を有し下肢切断した高齢者が多く、競技性を高めることよりも、皆で楽しむことを中心として実施している。

「発達障害部門」は、第2次短期ボランティア派遣事業（2015年）で導入した「レクリエーションスポーツ」

を継続して実施しており、複合的な運動を中心に行っており、集団リハビリテーションを行う患者さん層は、学童期の注意欠如多動性障害（attention deficit hyperactivity disorder：ADHD）や自閉症スペクトラム・アスペルガー症候群（Autism Spectrum Disorder：ASD）の患者さんが中心である。脳性麻痺やダウン症候群、二分脊椎症等の患者さんは個別リハビリテーションがメインであり、集団リハビリテーションの処方医師から出にくいのが現状である。重度の車椅子使用の患者さんに対して、「ボッチャ」や「車椅子サッカー」の提案も昨年の活動で行ったが、備品やコート等の環境面の問題もあり、導入のハードルは低くはないのが現状である。

先述したように「中枢神経障害部門」は、他の部門と比較すると、障がい者スポーツを出来る環境が整っており、訪問中も「ボッチャ」・「フライングディスク」・「風船バレー」・「卓球バレー」を毎日交代で実施していた。参加する患者さん層は、20代～70代と幅広く、脳卒中後遺症が大多数を占めていた。集団リハビリテーションに携わる理学療法士も1グループの活動につき、2～4名ほどで対応しており、その点も他部門とは異なっていた。

IX：今後の課題と展望

今回の訪問で、これまでの3年間短期ボランティア派遣事業で行ってきたことが着実にINR内に定着し、継続して行われていることに感銘を受けた。

本事業の当初の目的であるペルー障がい者スポーツ指導員講習会の運営も、今年度はINRのスポーツ委員会スタッフが立案・運営を行っており、日本側の関与がなく独立して行っていることは、本事業が一定の目的を達成したことを意味するのでは、と感じた。今回の訪問時に、なにか講習会を開催するのか、イベントを行うのか、とスタッフや一昨年・昨年を知っている患者さんたちからは聞かれたため、これまで日本から訪問して国際交流を行うことを楽しみにしていたことが分かった。INRの名称は、「日ペルー友好・国立障害者リハビリテーションセンター」であり、日本とペルーの友好の証として、INRの入口にはそのモニュメントがあり、二階の施設長の部屋の前には、日本庭園もある。現在、JICAボランティアで作業療法士の長期青年ボランティアが1名活動中であるが、日本文化紹介やこれまでの短期ボランティア派遣事業で行ってきたイベントを開催するのは難しく、INR内での日本を身近に感じてもらう機会がなくなったのは残念に思うところである。

INRスタッフとのミーティングの結果、2019年にペルーの首都リマで開催予定のPan American Gamesを見据えて、INRから患者さんを選手として育成することはもちろんのこと、スタッフとして運営をサポートしたいとの強い願いがあった。そのためには、まずどのような競技があるか知ることからはじまり、スタッフ自身の知識を深めていきたいとのことだった。

また、障がい者スポーツとしての色は薄くなるが、集団リハビリテーションの一環として、患者さんと携わるうえで、集団リハビリテーション（障がい者スポーツ）導入する段階の評価指標について模索していた。どのような評価方法を用いて…、どの基準になったら…、どの障がい者スポーツを…導入したら良いのか、明確となる指標を日本側から教えて欲しいとの要望が強かった。

また、それ以外にも集団リハビリテーション（障がい者スポーツ）の効果判定や退院後や集団リハビリテーション終了後にどのように地域コミュニティへ還元できるか、退院後に患者さんに継続して行ってもらうために、どのようなアプローチが必要か、地域との関わりをもつためには、何をすべきか等、患者さんを取り囲む社会的なところまで関わりたいとの熱意を感じた。

障がい者スポーツは、第二次世界大戦後負傷した兵のリハビリテーションの一環として発展した競技であり、医療で行うリハビリテーションが発展してきたものである。しかし、国際大会やパラリンピック大会などの競技性の高い大会に選手で出場となると、もはやリハビリテーションの一環ではなく、選手育成・強化が必要となる。INR内での障がい者スポーツの導入も、はじめは集団リハビリテーションの一環としてはじまったが、競技

を知り行う上で、その次の、上の目標が出てきて、集団リハビリテーションの一環としての範囲に留めるのか、選手育成まで視野に入れて行うのか、スタッフでも意見は分かれるところである。INRは、医療機関（リハビリテーションセンター）であり、利用者は医学的フォローの必要な患者という立場であることを考慮すると、INRでのフォロー中に障がい者スポーツの礎を築き、健康促進・身体活動の活性化、社会参加等の目的をメインで行い、退院や通院期間終了前に、選手として望みが持てる患者さんは、コミュニティでの活動の場を紹介し、時折INRスタッフがコミュニティでの活動もフォローする体制が最適ではないかと個人的には感じる。しかし、コミュニティでの活動も、ペルーではまだ社会的体制が整っておらず、今後福祉面についても障がい者を取り巻く環境が改善するればと願っている。このように、ペルーを通して自国日本を考えたときに、ペルーと比べると社会的に環境は整っているかもしれないが、医療現場で行われているリハビリテーションが果たして退院後に患者さんにとって有益・有効なものであるのか、社会参加の橋渡しを医療人として行えているのか、そもそもリハビリテーションと障がい者スポーツの概念が切り離されたまったく別世界のものとなっていないのか、日本側の課題も多くあるように感じる。

今回の訪問とこれまでの活動を踏まえて、一緒に身体を動かし、なにか一つのことを成すことは、言葉や文化が違って分かち合うことが出来、そこにスポーツの醍醐味があることを実感した。このような取り組みが国際協力の礎となり、相互交流・相互理解に発展していければ、と願わずにはいられない。日本は、2020年東京オリンピック・パラリンピックを控えて、「Sports for tomorrow」を後押ししているが、パラリンピックに出場できる選手はごく僅かであり、その背後にもっと多くのスポーツの前段階で支援を必要としている人が多数いることを、私たちは知らなければならない。そして、国際協力・支援は、一方的な知識伝達や一時的な時間・体験の共有だけではなく、長期的な双方の発展・成長を促せるようなもっと長期的視点が必要となってくることを実感した。

日本語を母国語とする日本と、スペイン語を母校語とするペルー共和国では、お互いの第一言語が違う中、コミュニケーションを取ることも難解なときがあるが、スポーツという万国共通のツールにより共同することで共有できる。異文化交流を行うことで、他国を知るとともに、自国を改めて見つめなおすことも出来、思考の幅が広がるのではと考える。今回は、集団リハビリテーションの一環としての障がい者スポーツを通してであったが、相互の文化・社会を知ることが出来、文化交流等も

出来、良い経験となった。今後の課題もまだ残され、展望としても展開の余地があるので、これからも INR 側と対話を重ね、機関の協力を得ながら、障がい者を有した方がより社会へ参加できる環境を整えられるように、微力ながら邁進したいと思う。

X：まとめ

これまで3年間に渡って JICA の短期ボランティア派遣事業の支援を受けて、日ペルー友好・国立障害者リハビリテーションセンターで集団リハビリテーションの一環としての障がい者スポーツの普及・促進活動に携わってきた。今年は、これまでの活動成果と今後の課題・展望を調査するために渡秘した。ペルー障がい者スポーツ指導員講習会の開催は、日本側の関与がなくても INR 単独で企画・運営・実行が行えており、当初の目標はとりあえず達成できたと考える。しかし、競技の導入や定着、フォロー体制にまだまだ課題は多くあり、今後も「医療」「スポーツ」「国際交流」「国際協力」のそれぞれの軸を生かして、日本・ペルー両国がお互いに成長し発展できれば、と願う。

文献

- 1) 河野眞：PT・OT ビジュアルテキスト 国際リハビリテーション学—国境を超える PT・OT・ST—, 羊土社, 2016, 316-321
- 2) 下田武良：ペルーにおける障がい者スポーツの普及・促進 JICA 短期ボランティア活動報告, 理学療法科学, 2015, 30(6), p5
- 3) 松田史代：ペルー障がい者スポーツ支援派遣事業の活動報告：JICA 短期ボランティア派遣事業, 鹿児島大学医学部保健学科紀要, 2016, 26(1), 51-58
- 4) 松田史代：ペルー国立障がい者リハビリテーションセンターでの活動報告, 鹿児島大学医学部保健学科紀要, 2017, 27(1), 71-77

The effect of para-sports activity in Peru National Disability Rehabilitation Center

Fumiyo Matsuda¹⁾

1) School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kagoshima University, 8-35-1,
Sakuragaoka, Kagoshima, 890-8544 Japan

Tel&Fax: +81-99-275-6801

E-mail: fumiyo@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

Abstract

I got the opportunity to the support project [Support of disabled sport project in Peru in 2015 and 2016] by Japan International Cooperation Agency (JICA) as short-term volunteers staff, at the Peru National Disability Rehabilitation Center (INR), which built with funds from Japanese aid. In this project, the support staffs were six physical therapist and occupational therapist, and twenty-three students under studying in physical therapy for three years (2014 to 2016). The activity of this support project was completed at last year, and we don't have an opportunity to activity in INR this year. Therefore, I had been in INR until 11th in September to 26th August due to research to the effects which we had done for three years in INR. Moreover, I had several meeting with medical staffs in INR and the staff in JICA in Peru about the future plan.